

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認雑誌第六二七号
平成二十五年七月一日発行(第四百十六巻第七号)

ホトトギス

七月号



俳句随想 〔三百七十二〕

汀子

太陽の陽をひと読ませることはよくあるが私は余り感心しない。俳句では日としてほしい。陽をひと読ませるならば、陰をつきと読ませたくなる。俳句は短い詩である。言葉を大切にしてほしい。季題の「麗か」を「春うらら」に、「耕」を「春耕」に「霞」を「春霞」とする。春と言わなくてもこれらは春の季題なので春をつけなくてもよいのである。「春眠」を「春眼」と書き誤っているのは、今まで直していたが、これからは意地悪婆さんになって、その句は没にする。

「薄氷」を動詞として「薄氷へる」と使う句があり、これは間違いである。「佇む」は「たたずむ」と読み、「たつ」と使う句が多いが、私はやはり正しく使つて欲しい。

そういう私も最近正しく書いたつもりが、間違えることがある。年齢の所為とするのは如何にも淋しい。一句一句を大切にして行かなければならないと思つている。私は怪しいと思つた字は必ず辞書を引いてみることにしている。似たような字を書いて見ても間違いかも知れない。日本語の文法もなかなか難しいが、理解するとなるほどと納得するようになる。我々の世代は文法を習う頃戦争で勉強が抜けている時代であつた。今でも遅くない日本語は一生の勉強と思いたい。

句日記 汀子

予定皆キャンセルとなる梅雨の怪我

七月十二日 清交社

怪我也又病める一つよ梅雨憂しと
失ひてならぬは氣力怪我の夏

七月十三日 工業倶楽部

蠅虎ふと失ひし所在かな
昼寝すること回復の途上とも
怪我癒ゆるための昼寝と思ひけり
六甲の稜線模糊と夕焼くる
昼寝して取戻したるわが身かな
夕焼の空の広さに退院す
七月十六日 悼 嶋田摩耶子様

札幌の夏摩耶子さん永遠に生き

七月十八日 長谷川先生へ

岳麓のえにしをつなぐ月見草
七月二十六日 きさらぎ会出句

夏霧の深き山路を引返す
汗かかぬ養生の身のふと淋し

平成二十四年七月 ロイヤル俳壇出句

夏帽子かぶり直して出て行きぬ
水無月の予定果せぬ怪我に耐へ
夏菊やりハビリ室の入口に

七月三日 看護師へ

看護師の楚々と涼しき笑顔かな

七月三日 小野先生へ

夏の夢辿る麻酔の世界へと

七月四日 魚谷先生へ

再手術名医にゆだね露涼し

七月五日 春菜会

露涼し熱く語りし日は遠し

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年七月二日 むさし野吟行会

七変化今日は武蔵の色集め
竹落葉濡れ色といふ落着きに
蚊と雨に好かれ君には嫌はれて
病葉の掃かれ公園目覚めゆく
黒南風と白南風むさし野に対峙
七月五日 カトリツク新聞選者吟
明易し日々十字架を背負ひつつ

七月五日 蕉心会

忙しきことも楽しみ五月晴
涼風の止むよりアスファルト地獄
箱庭の蘊蓄を聞く五六人
僕何もしてゐませんと逃げゆく
白々と積むに任せて竹落葉

七月七、八日 あうたう句会

あぢさゐを活けて大吟醸の瓶
かおりんのガイド涼しく訛りをり
ナイターを見たから今日は二日酔ひ

七月九日 朝日カルチャー若草句会

べらんめえ朝顔市は負けねえよ
青葡萄 葡萄 甲斐の稜線彩りて
虎涼し 自力優 勝消滅す
二回目の手術涼しく終りけり
武田菱はためく棚の青葡萄
涼しさを繋ぎて都心副都心

七月十二日 土筆会

病葉も彩りとして名苑に
神様の贈り物かも夏休
夏休今年もとれず仕舞かな

雨に耐へ風にたへ病葉となる
摩天楼削つてゆきしはただがみ
通し 鴨 後楽園の主めく
七月十三日 浜田吟行会

被爆川梅雨の水嵩ありにけり
夏霧を吐いて張つてある橋の先
梅雨空を引つ張つてある橋の先
梅雨茸を育んである湿りとも
兜虫探す眼となりなほ奥へ
梅雨茸を踏まねば行けぬ径かな
梅雨雲を日矢穿ちゆくところ
七月十四日 石見ホトギス俳句大会

雪加鳴く音を囁してあるやうに
五月雨の音三瓶そぼ吸る音
草書体めく振花のさ揺れかな
夏帽子昨日も飛ばしてたんちやふ
時鳥風が消しゆくほどの距離

七月十七日 草木瓜会

気怠さは百日白の午後にまで
雷の予報今晚あらうとは
一閃に始まる雷の怒りかな
不夜城を闇に還してはたがみ
百日紅程良き距離を彩りて
ついさつき梅雨明宣言出たといふ
七月十九日 登高会

雲の峰 高校球児見下ろして
夕端居何時も猫を待らせて
汀子句碑いつも濡れ色合飲の花
三瓶山主峰は四つ合飲の花
合飲の花目線に咲いてある三瓶
子の未来親の来し方夕端居

七月二十日 悼 嶋田摩耶子様

これよりの札幌淋し夜の秋
七月二十一日 北海道ホトギス同人会 大会
蝦夷といふ君との逢瀬似合ふ夏

麦秋に近付いてゆく主翼かな
明日からは暑くなるてふ江戸を発ち
一面の青田地球の丸さ見せ
雲海を裾に敷き詰め旭岳
虚子遺墨一字一字に灯涼し
夏風邪の目一際佳人かな
七月二十四日 若水句会

三瓶野の沙羅一輪の閑けさに
心太噉れば心みちのくへ
はんなりと焚かれて京の夏炬かな
夕べには終の一花となりし沙羅
浄土成す沙羅落花沙羅落花かな
夏炬焚く古墳を今に守る村
七月二十五日 目黒学園句会

駆逐艦雪風スクールに消ゆる
スクールや国防の日々ありしこと
秋を待つ都心は気温上昇中
木々影を広げゆく日々秋近し
蟬鳴いてないて余生を減らしゆく
七月二十六日 ひとり文芸ミュージカル三毛子 推薦文

春灯下一歩に明治香りたる
暮の春ミサへ急ぎし男坂
七月二十七、二十九日 野分会夏行

噴水の秀にスタジアムしみゆく
先づ日焼対策を以て佳人たり
この暑さ耐へてなんぼの野分会
Sサイズてふ大盛りのランチ暑し
纜に 鷗 整 列 する 暑 さ
新しき汗に一句を持ち去られ
虚子踏みし甲板に立つ涼しさよ

夏燕 眺みし甲板上に立つ涼しさよ

黒揚羽何か言ひたげなる飛翔
寝坊して汗の吟行とは無縁
橋の黙海の騒きといふ晩夏

雑詠

廣太郎 選

もう一度戻りて隅の踏絵見る 熱海 嶋田一步
 素通りのできぬ踏絵の汚れ見る 同 同
 絵踏せし人の数なる汚れと見 同 同
 春寒の回転扉抜けて海 神戸 山田佳乃
 川風のひと撫でしたる獺祭 同 同
 片栗の花の香ほどの吐息かな 東京 内藤呈念
 梅日和すなはち池は亀日和 同 同
 片減りの下駄になじみて鳴雪忌 同 同
 大銀杏その後を聞かず実朝忌 同 同
 嘯の一すぢとなり日差し来し 同 今井千鶴子
 露天市ガラクタ市につちふれる 同 同
 恋猫と思ふ間もなく走りけり 同 同
 少年の育てし仔牛春の糶 神戸 藤井啓子
 祖母の手の旧かなづかひ雛の箱 同 同
 逆上り課されてをりし大試験 同 同
 シルクロード終点の古都霾れる 奈良 古賀しづれ
 黄砂降る古都に火の行水の行 同 同
 霞より浮き鷗尾の空塔の空 同 同

待つ顔をガラスに映す春灯下 香川 湯川 雅
 一本の水突き刺して芹の生ふ 同 同
 同じ香に強さ違へて梅の花 同 同
 雪国も立春の日をたまはりし 長岡 安原 葉
 立春の明るさの雪なりしこと 同 同
 野も山も雪解日和となりけり 同 同
 受付に傾ぎ癖ある紙雛 神戸 涌羅由美
 かんばせを小筆で払ひ雛納 同 同
 結納の口上を聞く春障子 同 同
 初明り地球は四十六億歳 相模原 木村享史
 雪女哭くかと聞けば風の音 同 同
 寒明けし鴉からからからからと 同 同
 額には日ざし指先には余寒 熊本 岩岡中正
 力尽くして春寒に学ぶこと 同 同
 春潮を見て来て飢ゑのやうなもの 同 同
 天空の鏡の如き霜柱 福山 竹下陶子
 天帝に腰砕けたる霜柱 同 同
 清貧の九十年や玉子酒 同 同
 赤門の木組みにひそむ余寒かな 東京 橋本くに彦
 キャンパスの残る寒さをまとひをり 同 同
 赤門の内なる静寂大試験 同 同
 海だけがひかりて鯨曇かな 渋川 木暮陶句郎
 心にも色の変はり目鯨群来 同 同
 鯨群来 水平線に夢の跡 同 同

雑詠句評（六月号より）

佳乃・しげ人・公次

くに彦・一步・純也

比奈夫・仁義・雅

さい雪・廣太郎

遺影へと十八歳を足す寒さ 芦屋 小田ひろ

一読少し難解に思えたのだが、十八というと、阪神大震災から今年で十八年がたつので、そのことが根底にあるのかと思う。あれから十八年。足すというのだから、若くして亡くなられた方のご遺影に向き合われたのだろう。

一月の十七日が来るたびに年齢を重ねてしまうという悲しみ。寒かったあの日を思い出すと共に心いつまでも消えない哀しみを寒さと表現されたのである。（佳乃）

平成七年一月十七日に起こった阪神・淡路大震災で御家族を亡くされた作者である。最近では東日本大震災がどうしてもクローズアップされているが、被災された作者にとっては、十八年前に犠牲になられた御家族の姿が今でも思い出されるのだ。季節が非しいまでに迫ってくる。（廣太郎）

風花の約束 四条河原町 神戸 山田佳乃

約束の場所は四条大橋の近くであろうか。約束の時間より早く着いてしまった作者。折から天恵の風花が舞い降りてきたのである。この句は一切の説明を持たず、たった四つの単語からなった俳句である。しかし、「風花」と「四条河原町」の言葉より作者の心の弾みや華やきが自然と伝わってくる。言葉の持っている力を十分に引き出している一句である。

この句を何度も口遊んでいるうちに自分が風花の約束の主人公になっっているかのように思われてきた。（しげ人）

何ともロマンチックな雰囲気を感じ出している句である。約束の場所が京都の「四条河原町」というのも、やはり揺るぎない風情があり、囚らずもそこに舞う「風花」が、舞台装置としてびっぴりである。飛び切りの佳人が主演の恋愛映画のシーンを、つい作者と重ね合わせてしまった。（廣太郎）（以下略）

天地有情

虚子言ひし雪の小諸を住み憂しと
 師を偲び妻偲ぶ初旅にあり
 次郎左衛門雛と暫しの目語かな
 ここからは初花となる迅さかな
 恙癒ゆ君と高きに登りたし
 朝露の大江戸発ちて小江戸へと
 生きてゐることの証しに日脚伸ぶ
 色のなき世へ唐梅は色を伸ぶ
 梅が丘てふ街に住み梅の花
 この梅に住み古り母も夫も逝き
 満ち潮の堂島川は春の色
 学び来し堂島の春懐かしき
 夜鴨啼く湖心と思ふ大闇に
 一日とて目の放されぬ菊作り
 碁笥かとも見えて雛のよき火桶
 懸想文入れてやりたき雛筆笥
 雪嶺を簾に置いて松の内
 ガラス戸を隔つ街音日脚伸ぶ

相模原 木村享史
 同 同
 長岡 安原 葉
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 大阪 蔦 三郎
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同
 吹田 宮崎 正
 同 同
 福山 竹下陶子
 同 同
 神戸 後藤比奈夫
 同 同
 徳島 上崎暮潮
 同 同

江戸選

雨催ひミモザの黄色陰りたる
 春泥を詫びてタクシー拾ひけり
 鮎子の海に淡路の横たはる
 特上の白子干とて海老混じる
 春色といひて足早なりし色
 春聯にめでたき文字のなんやかや
 なにげなく出て来し色にクロッカス
 ちがふ色咲き揃ひみてクロッカス
 墨を摩る音のきしめく余寒かな
 起き出でて一人は淋し春障子
 梅林を行きて渚をゆくごとし
 黒き土より音立て物芽出づ
 十八年空き地の主やいぬふぐり
 春寒や忘れたはずの人のこと
 春立つも待つてふ心なほ失せず
 星もなき春の闇より湧く氣息
 梅の香の真つ只中に入りけり
 早春の空に呼ばれてをるやうな

榎原 稲岡 長
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 同 後藤立夫
 熱海 嶋田 一歩
 同 同
 仙台 赤川 誓城
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同
 芦屋 酒井湧水
 同 同
 金沢 藤浦昭代
 同 同
 東京 河野美奇
 同 同

天地有情句評

汀子

日が永くなる事への喜び。

この梅に住み古り母も夫も逝き

東京

今井千鶴子

この地梅が丘への思い出。

師を偲び妻偲ぶ初旅にあり

相模原

木村享史

学び来し堂島の春懐かしき

吹田

宮崎 正

亡き妻を心に師年尾を偲ぶ初旅に参加。

大阪堂島での青春。

ここからは初花となる迅さかな

長岡

安原 葉

一日とて目の放されぬ菊作り

福山

竹下陶子

今年の桜が描けた。

命あるものへのいたわり。

恙癒ゆ君と高きに登りたし

東京

稲畑廣太郎

懸想文入れてやりたき雛筆筭

神戸

後藤比奈夫

恙の癒えた友への励まし。

作者の想い入れ。

生きてゐることの証しに日脚伸ぶ

大阪

蔦 三郎

(以下略)